東南アジアのインド化

石　井　米　雄

東南アジアのインド化には色々な段階が考えられるだろう。まず最初にインディアン・コロナイゼーションという話が出てくる。有名な扶南の建国伝説には、天竺から来た混塡（コンテン）が裸でいた女王の柳葉に貫頭衣を教えたという話がある。だが実際にインド人が東南アジアに植民する形でインド文化を伝えたかどうかは、文献的には何もわかってはいないし、その後の東南アジアのインド化の問題にも大きな役割は占めてはいない。否定こそできないが、最初の問題としては違う形でのインドの影響が語られるのではないだろうか。

二番目には、「下から」のインド化である。例えばジャータカにもインドの商人が東南アジア方面に出かける話が出ており、かなり昔から交易が行われていたであろうことが伺われ、インドと東南アジアとの間に国家や王権とは違うレベルでのインド文明の伝播を考えることができるだろう。最近ではインドの農業が東南アジアに伝わったのではないかという意味で、農業による東南アジアのインド化が言われている。これはインディカ米の渡来と結びつけて考えた方がいいだろう。東南アジアの稲がベンガル湾系列とメコン系列で伝わったという説が正しいとすれば、ベンガル湾系列でインドの稲が伝わったことが考えられる。その場合には交易と並んで農業的なレベルでのインドの影響があったと考えられる。

しかし歴史学者がインドの影響を考える場合は、国家編成の原理としての影響に重点をおいている。日本の古代国家が、隋・唐の律令制という外来の国家統治のイデオロギーによって国家編成をしてきたように、外来の思想が国家編成の原理として、東南アジアに影響を与えた点が歴史学者の一番の興味を引いている。

東南アジアの研究は20世紀初頭からフランス人やオランダ人によって盛んになってきた。その頃はまだ「東南アジア」という言葉は使われていなかったが、ここにはインドの影響を受けた地域と中国の影響を受けた地域があるということが言われるようになる。1920年代に出たルネ・グルッセ(Rene Grousset）の「極東史」でも明らかに2つの地域を識別している。国家編成の原理としてのインドの影響を一番明確な形で示したのがジョルジュ・セデス（G. Coedes）で、1944年に書いた「極東におけるインド化された諸国の古代史」の中で、インドの影響を「アンドゥイザシオン」というフランス語で表名している。この言葉の翻訳を巡る紆余曲折が、今日の話のテーマに関係してくることになる。アメリカのランドン（K. P. Landon）が1949年に訳本を書いたときに、彼は「ヒンドゥーイゼーション（ヒンドゥー化）」と訳している。ところがセデスのこの本は、1948年にパリで出版された「世界史」の第8巻に「インドシナとインドネシアにおけ

るインド化された諸国」と題を変えて掲載され、結果的には1968年にホノルルから出された訳本によって「インディアナイゼイション（インド化）」という言葉で定着し、一般に広まっていくことになる。

1944年の初版と1964年に出された第2版の間には微妙な違いがある。セデスは一度書いた文章はほとんど直さず、新しい学説が出ると何行か付け加えることによって、パラグラフを広げていく形で改訂している。興味深いのは「アンドゥイザシオン」の定義に「サンスクリティザシオン（サンスクリット化）」を一行付け加えていることだ。実は1950年代にインド社会学者や人類学者の間では「サンスクリット化」の問題が盛んに議論されていた。セデスはその議論を踏まえて、自らのいう「アンドゥイザシオン」が内容的にはサンスクリット化と同じものだという加筆をしたのだろう。私がこのことにこだわる理由は、我々が「インド化」や「インドの影響」と言う場合に、セデスがこれを「サンスクリット化」と限定したことが大きな意味を持つのではないかと考えるからだ。少なくともそれを無限定に使えば、様々な問題が起こりうる。セデスが限定したことに意味を強調しておきたい。

国家形成の原理という形でのインドの影響を考える場合、一種の思想体系が入ってこなければならない。さらに思想体系を支えている色々な条件が一緒に入ってこなければ、本当の意味でインドの文化をセットとして受け入れたことにはならない。この場合のセットとは、オーガナイズド・カルチャー（組織化された文化）であるとセデスは規定している。インド化を言うならば基本的にカースト制が入らなければ、オーガナイズド・カルチャーは完結しない。しかしカースト制なしに入って来ているのが東南アジアのインド化の特徴であろう。例えばタイでは、ヴァルナはパンナ，ワンナという言葉で、ジャーティはチャートという言葉で入り、文献上からはいかにもカースト制が取り入れられたか如き印象を受けるが、実態はほとんど伴っていない。昨日の議論にも関連するが、私はバラモン・クシャトリヤコンプレックスというのは非常に重要だと考えているが、東南アジアにはそれがバラモン抜きで入ってきているという印象がある。バラモン自体は東南アジアにもおり、その意味ではバラモン・クシャトリヤはあると言わねばならないが、それはいわゆるインド的なバラモン・クシャトリヤコンプレックスとは全く違った形だ。いわば名前だけが入っている。その両者の関係の違いを明確に見極める必要があるだろう。

東南アジア史をインド化の観点で捉えることの是非が問われていることは否めない。にもかかわらず有効な時代区分だと思えるのが「13世紀の危機」という考え方である。セデスの言う「アンドゥイザシオン」には5つのファクターがある。王権思想、ヒンドゥー・仏教的なリチュアル、プラーナ神話、ダルマ・シャーストラ、そしてサンスクリットの使用という5つの

文化要素がセットとして東南アジアに受け入れられた。これを「アンドゥイザシオン」と言うのだと規定しているのだが、インド化をサンスクリット化なのだと規定した問題提起のフォローができていない。それには二つの方向を考える必要があると思っている。その一つは「13世紀の危機」を境界にした東南アジアの状況である。セデスをはじめとするフランスの学者達は、東南アジアのサンスクリット化への想い入れが非常に強いという印象がある。だが、それを13世紀以降にまで延ばしてしまうのはまずいだろう。サンスクリット文化は次第に衰え、大陸部の方では上座仏教化が進み、そして島嶼部の方ではイスラーム化が進むという状況が出てくる。その中でオーガナイズド・カルチャーがどのように変質していったかという視点が必要だと考えている。

もう一つは、インド化された国によって及ぼされたインド化である。例えば、モン人がインド文化を受け入れ、モン人の文化をビルマ人が重要視することによってビルマがインド文化を受け入れていく。タイが一度インド化されたクメールの影響を受けてインド化される。そういう派生的なインド化という視点が必要ではないか。その意味で議論が必ずしも詰められていないのが、東南アジアのサンスクリット化がどれくらい真面目に行われたかということと、サンスクリット文化の衰退以降のインド文化の変質への視点である。

セデスの言うサンスクリット化された意味でのインド化の典型的な例は、アンコール帝国におけるデーヴァ・ラージャ（神なる王）という考え方で、強力な王権を支える思想があったからこそ、アンコールの巨大なモニュメントができたのだという議論のイデオロギー的な背景となっている。しかしこれに関しては批判が多い。クルケ（H. Kulke）は、インドでは少なくともそんな意味はないという議論をしている。タイ人の歴史学者のニティの言うデーヴァ・ラージャ論では、クメールにおける氏神的な神々のハイアラーキーの中でのラージャ（王）という意味で、国王が神であるという考え方ではない。そういう批判はあるが、13世紀以前の東南アジアでのインド文化の受容の仕方として、デーヴァ・ラージャというものがある。

13世紀以降の議論については、タイを例に考えてみたい。例えば、オーガナイズド・カルチャーの要素としてダルマ・シャーストラの受容が言われ、東南アジア史には必ず東南アジアに『マヌ法典』が入っていると書かれている。しかし、我々の知る現在の東南アジアに『マヌ法典』は入っていない。これは東南アジアにおけるカースト制の欠落と関係がある。『マヌ法典』とはカースト制を前提にしたある種の救済論である。それぞれのカーストに応じた義務を果たすことが、その人の宗教的な救済につながっていく。そういう社会的背景なしに『マヌ法典』が入っても何もならない。では『マヌ法典』の何が入っているのか。これはヴャヴァハーラと言われる18の訴訟

項目が入っているのみで、例えば、人類の発生やカーストの起源などという問題は全く入っていない。18の項目と掲げながら項目数は地域によってバラバラで、タイではさらに「18」という言葉もなくなり数も29になっている。これはローカライゼーションがさらに先に進んだ段階であろう。しかしこれを含めて「インド化」と言えるのだろうか。インド化を「サンスクリット化」と規定するならば、これはインドの影響ではあるが「インド化」と言うべきではない。その意味でも概念規定の明確化が必要だろう。

例えば、1351年にできたタイのアユタヤ朝は仏教王国として知られているが、王室儀礼に関してはバラモンの存在が欠かせない。しかも年代記には、タイにはカーストがあり、バラモンがいるので、クシャトリヤ・バラモンコンプレックスがあるのだと理解されまじき筆で書かれている。しかし別の法律書で見ればバラモンの地位は極めて低いものでしかない。バラモンは祭祀を司る技術者あるいは法律の解釈者でしかなく、国王をチェックする機能は全くない。国王の威厳を示し、サンスクリットの名をつけ、王室儀礼に欠かせない存在でありながら、全くの下僚にすぎないのだ。バラモンの存在とクシャトリヤである王という構図は、まさにインド的なバラモン・クシャトリヤコンプレックスという感じがあるが、内容は全く違う。この事はまさに東南アジアにおけるカーストの欠落を考えなければわからない問題だろう。

東南アジアには確かにインドの影響はあるが、その内容を時代に照らして理解していかなければ語ることはできない。そのためには最初にインドの影響が直接及んだ可能性のある「コロナイゼーション」を考えることも必要かもしれない。交易の問題も考える必要があるだろう。だが多くの場合は国家編成の原理として考え、オーガナイズド・カルチャーをワンセットで受け入れていた時代が、本当にどこまで真面目にインドと同じであったのかを検討する必要がある。そして13世紀以降にサンスクリット文化は衰退していく中でも、インドの影響は根強く今日まで残っている状況をどう考えるかという問題がある。あるいはサンスクリット化されたクメールによってタイがインド化されたような、派生的なインド化をどう考えるのか。いずれにせよ大前提であるカーストの欠落は決定的で、その意味での東南アジアのインド化は、相当大きな括弧つきで考えられるべきだろう。